

歯科適応漢方の解説と歯科東洋医学の今後の展開

責任者:王 宝禮

コメンテーター:柿木 保明

小澤 夏生

近年、歯科では、抜歯後疼痛に立効散、口内炎に半夏瀉心湯、茵陳蒿湯、黄連湯、口腔乾燥症に五零散、白虎加人参湯、歯周組織炎に排膿散及湯が良く投薬されている。これら7種の漢方薬は西洋医学の発想での適応として処方されている。一方、歯周病は炎症疾患であり、免疫低下、微小循環障害であるため、漢方医学的には気虚として「補気剤」や血の異常として「駆瘀血剤」が処方されている。また、口腔乾燥を症状から「熱」や「水毒」と考えた場合「清熱剤」や「利水剤」が適応と考えら処方されている。さらに、最近では、舌痛症や、味覚障害、口臭症などいわゆる口腔不定愁訴の訴えが増えている。口腔不定愁訴は神経系、免疫系、内分泌系の低下に伴って一連の口腔症状を呈する。つまり、生気が弱っていることから「虚証」と捉え補剤系の漢方薬が有効である。今回、歯科適応の漢方処方の実際を症例と文献から紹介し、漢方医学的に口腔疾患に適応と考えられる漢方薬に関して話題提供をする。